

松本ピアノ三代の偉業を称えて

株式会社 ピアノ調律センター

会長 宇都宮 誠一

[銀座山野楽器資本参加] 創業48年

この度、君津市松本ピアノ・オルガン保存会の手によって、日本のピアノ製作史上記念すべき名著が発刊される。心からのお慶びを申し上げたい。

私は、昭和の初めに生を承け、東京の片隅で仲間ともどもピアノ、オルガンのお世話をしながら、今や八十路の半ばに達しようという、ちまたの一介の調律師に過ぎないが、先人たちの足跡を追って今も幸せである。

しかし、これも同業の父宇都宮信一が幼い日から、縁あって近隣の松本ピアノ月島工場に天才新吉先生の直弟子として入門、ご長男の広先生はじめ御一族の方々からピアノ技術に関するすべての事項について家族同様のお仕込みを受けたご縁に始まっている。

父は、同門のピアノ技術者が相寄って後日に組織した「松友会」と名付けた親睦の集いに家族ぐるみで進んで参加しており、その地その地での同業人との人生の歡びを交換しあう姿が夥しい写真の笑顔として遺っている。

この会は、あのつらかった戦時を越えて父が他界した86歳の最後の日にも続いており、葬儀には時の同会代表世話役宇佐美隆氏の熱涙込めた弔辞が評判だった。

そこにはピアノ調律師としての哀歎「地の塩」として生涯を送ることの誇りに満ちていたように思うが、その所以は「楽器に命を吹き込む」処方、在り方、喜びをいわゆる「先輩」を通して経験させ、教えずして心得させて下さった松本家ご一家の開かれた人生道場にあった事が、実業につけばつくほどよく解ったという話であった。

私のアルバムには、景気が誠に良ろしかった国産ピアノ発展期に、極意を知るのはわれら一門とばかり芝居気たっぷりお揃いの赤い陣羽織を着込んだ松友会の面々が、家族連れで新吉先生のお礼参り君津詣でをした写真も現存している。

ただ、今の私の脳裏には、三代目新一先生が学校教育の一環に楽器作りの原理を教える姿が、二代目夫人亡き和子様のお心のこもったご営業ぶりとともに 貴く脳裏に焼き付いていることを付記しよう。

松の代の 三台揃う 朝霞

まさにこの魂は不滅なのである。

松本ピアノの歴史 目次

写真集

序 松本ピアノ三代の偉業を称えて

目次

はじめに	22
第1章 松本オルガン工場	23
生い立ち	23
オルガン製造所見習い	23
1. 徒弟修業	23
2. 西川風琴製造所	24
3. 解雇	26
自立	28
1. 紙巧琴製作	28
2. 築地オルガン工場	29
3. 築地美以教会	29
第2章 松本ピアノ製作	31
渡米修業	31
1. 渡米	31
2. ブラドベリーピアノ工場	32
ピアノ製作	36
1. 妻るい昇天	36
2. 築地工場の生産再開	37
3. 辻田つねと再婚	38
4. 松本ピアノ製作	40
松本楽器合資会社	42
1. 松本楽器合資会社設立	42
2. 松本楽器店	43
月島工場	44
1. 月島工場設立	44
2. 楽器店の変遷	48
3. 月島工場の災難	51
4. 長男広	53
第3章 八重原工場	55
八重原工場設立	55
1. Sweet Tone 松本ピアノ	55
2. 六男新治	55
3. 新吉永眠	57

4. 二代目新治永眠	58
戦後の松本ピアノ工場	59
1. 新治夫人和子の奮闘	59
2. 三代目新一	61
第4章 ピアノ作り	63
新一の話「ピアノの音の基礎部分」	63
1. 明治のピアノ	63
2. ピアノの材質	63
3. DNA	64
職人育成	65
松友会	66
第5章 文化遺産松本ピアノ	68
おわりに	70
資料編	71
松本ピアノの歴史年表	72
参考文献	74
渡米日記	76
ミュージック トレード レビュー誌	87
松本新吉投稿論文	88
1. 有鍵楽器の構造及び保存法	88
2. パイプオルガンに就て	89
3. ピアノの撰択	90
引用記事とカタログ	93
1. カタログ	93
2. 引用記事	94
松本ピアノ関連家系図	98
あとがき	99
『松本ピアノの歴史』発刊 協賛者名	100
松本ピアノ・オルガン保存会	100
コラム欄	
コラム① 紙腔琴	26
コラム② メソジスト	29
コラム③ ブラドベリーピアノ	32
コラム④ 霊岸島病院	39
コラム⑤ 松本ピアノの音色	69

はじめに

(敬称略、年齢は数え年で表示)

ピアノは楽器の王様である。「日本ピアノ調律師協会」の資料によると、1709年にイタリア人クリストフォリが考案している。チェンバロとは違い、ピアノは音の強弱を弾き分けられるので、作られたイタリアではピアノフォルテと呼ばれていた。作曲家が喜び、ピアノ曲に限らず、交響曲もピアノを弾きながら作曲するようになった。

今のピアノは、88鍵が主体で音域が非常に広く、楽器の王様と言える。

楽器の王様ピアノの音色に魅せられ、明治時代に音色のいいピアノ作りに熱中し、舶来品を凌ぐと評判のピアノを作った松本新吉【図1】は、国内ピアノ作りの先駆者の一人である。新吉は、明治37年8月の『音楽新報』(音楽新報社)に「ピアノの撰択」を投稿、ピアノ作りの^{ワザ}技を解説し、「スウキトーンは我が松本ピアノの第一の特徴である」と述べている。ピアノ製作者による日本で最初の技術論と言えよう。

日本人が西洋楽器をよく知らなかった明治時代に、松本新吉はオルガン【図2】、ピアノ作りに取り組み、渡米してピアノ作りの技を習得、帰国して心地よい音色(Sweet Tone)の松本ピアノ【図3】を作り出した。

築地や月島の工場でピアノを作り続けたが、関東大震災の後、月島工場は長男広に継がせ、六十歳の新吉はSweet Toneピアノ作りの技を後世に伝えるべく、千葉県八重原村外^{ヤエハラ}箕輪^{ソトミノワ}に工場を建て、六男新治にピアノ手作りの技を伝え【図4、5】、その技は孫の新一も継承【図6】した。松本ピアノの音色は多くの人達に好まれ、発注が続き、二十世紀の初めから終わりまで作り続けられたが、大量生産の時勢に抗しきれず、三代目の松本新一は工場に保管していたピアノとオルガンを君津市に寄贈し、平成19年に八重原工場を閉鎖した。

君津市では、平成20年度に、「文化のまちづくり」に応募して君津市が承認した団体に必要経費の一部を補助する「文化のまちづくり市税1%支援」制度が発足した。

平成19年12月に発足した「松本ピアノ・オルガン保存会」の企画は「文化のまちづくり市税1%支援事業」として認定された。

^{トコシロ}常代村(現、千葉県君津市常代)生まれの松本新吉が創作し、孫の新一迄作り続けたSweet Tone 松本ピアノが、君津市の文化遺産として開花し、多くの人々がいつでもSweet Toneを楽しめるように、当会は、松本ピアノ修復を手伝い、コンサート開催、歴史展開催などで「松本ピアノ」の歴史と音色を伝えることに努めている。

平成23年度は、当会が収集した松本ピアノの歴史関連資料を整理し、小冊子『松本ピアノの歴史』を作成した。